文部省著作

高等小學讀本 六

發行所 日本書籍株式會社

文部省著作

高等小學讀本 六

發行所 日本書籍株式會社

目錄

第一課　動物と植物との關係。

春、野原を散歩してみると、花のあたりに、蜂・蝶(ちょう)・花虻(はなあぶ)などの多くの昆虫が集ってゐて、花の中に頭を入れて、蜜を吸ひ、花粉をからだにつけて、花から花へ、いそがしさうに飛んでゐる。昆虫は、かうして、植物から、その好きな食物をとり、植物は、動物によって、その花粉を他の花に傳達することができるのである。

秋、林の間を散歩してみると、木の枝に、種々の鳥が來ては、美しく熟してゐる果實を啄(ついば)んで飛んで行く。鳥類は、かうして、植物の、うまい果實を食ひ、植物は、動物によって、その種子を、四方に散布することができるのである。

動物と植物とが、生存上、密接な關係をもってゐることは、この、一二の例でも明かであるが、こゝに、人の見ることのできないところに、大きな關係のあることがある。

すべて、動物は、呼吸作用によって、空氣中の酸素を吸ひ、これを、體内で、炭酸がすとして吐き出すものである。炭酸がすは酸素と炭素とが化合してできるもので、ひとり、動物や、その他、一般生物の呼吸作用によってできるばかりでなく、物の燃燒するときや、腐敗するときや、その他、種々の原因からもできるが、動物の生活には、はなはだ、害のあるものである。それで、もし、この炭酸がすを消費するものがないならば、いかに、全地球をおほってゐる空

氣でも、歳月を經るにつれて、炭酸がすを含む比例が、いちじるしく增してきて、地球上の動物は、つひには死滅すべきはずである。しかるに、空氣中の炭酸がすの分量は、平均すれば、一定の比例をたもってゐて、動物が、無事に成長し、蕃殖することのできるといふのは、炭酸がすが、水中にとけ去るばかりでなく、植物がこれを消費するからである。

植物は、呼吸作用によって、動物と同じく、酸素を吸ひ、炭酸がすを吐き出すものであるが、その作用は、動物のほど盛でなく、したがって、吐き出す炭酸がすの分量も、あまり多くはない。しかるに、植物には、他に、さかんに、炭酸がす

を取り、酸素を放つ、特別の作用がある。この作用は、同化作用といって、植物體の綠色の部分、ことに、葉面にある氣孔によって、炭酸がすを取り、その葉綠體の中で、日光の助を借りて、この炭酸がすを分解して、酸素を放ち、炭素を取り、それから、大切な食物をこしらへるのである。それで、もし、この炭酸がすを供給する途がないならば、歳月を經るにつれて、空氣の炭酸がすを含む比例は、いちじるしくへってきて、地球上の植物は、つひには枯死すべきはずである。しかるに、植物が、思ふがまゝに成長し、繁殖することのできるといふのは、炭酸がすが、絶えず供給されるからで、これを供給するのには、他に、種々の原因があるが、動物の呼吸作用も、あづかって、力あるものである。

今、金魚を細口の瓶に入れて、一二日も、水を取代へないでおくと、金魚は、つひに死んでしまふ。これは、水中にとけてゐる酸素が吸ひつくされて、呼吸に適しないよーになるからである。しかるに、もし、その中に、青々とした水草を入れておくと、水を取代へないでも、金魚は、わりあひにながく生きてゐる。これは、前に述べたよーな關係が、瓶の中の金魚と水草との間に行はれるからである。

第二課　わが國の農業。

太古は、人口はなはだ少く、人智も、またきはめて進まざりしがゆゑに、人々は、あるひは、鳥獸を獵し、あるひは、魚貝を捕へ、あるひは、木の實をとりて、食物とし、洞穴などを住居として、その生を送りたりき。しかるに、年をふるにしたがひ、人口、やうやく增加し、自然に生ずる物のみにては、不足を告ぐるにいたりしかば、人々は鳥獸を飼養し、ついで、植物を栽培して、衣、食、住の材料を得ることを工夫するにいたれり。これ、すなはち、農業の起原なり。

されど、當時の農業は、その方法、はなはだ粗略にして、穀草の栽培のごときも、わづかに、種子をおろして、その成熟を待つにすぎず、肥料を施すがごときことは、さらに、

知るものなかりしがゆゑに、地力、しだいに衰へて、收穫、やうやく減ずるにいたれば、さらに、新地を開墾して、これに栽培する有樣なりき。しかるに、人口、ますます增加して、かゝる方法にては、多數の人口をさゝふることあたはざるにいたりしかば、つひに、その方法を改良し、品質よき產物を、多く出すことを工夫するにいたれり。現今、文明國の農業は、じつに、かゝる狀態にあるなり。

わが國は、古來、「瑞穗の國」と唱へられ、氣候溫和、地味肥沃にして、きはめて、耕種の農業に適せるがゆゑに、漁獵とともに、耕種の農業を行ひ、穀草、ことに、米、麥の栽培は、もっとも早くより開けたり。

現今、わが國の耕作地は、臺灣をのぞきて、およそ五百萬町歩あり。これに栽培するもの種々なれども、米、麥はその大部分を占め、米の作付反別は、およそ二百萬町歩、その收穫は、年々、およそ四千萬石にして、麥の作付反別は、およそ百八十萬町歩、その收穫は、年々、およそ二千萬石なり。わが國の米は、品質、ことに優等なれば、ひろく、世人の嗜好に適せり。

養蠶も、また、早くより開け、今、なほ、ます〱盛におもむけり。繭の取入高は、年々、およそ二百五十萬石にして、繭より製する生糸は輸出品の首位を占め、その價額、年々、およそ七千萬圓におよぶ。また、茶も、盛に栽培せられ、その輸出價額、年々、八九百萬圓におよぶ。

わが國の農業中、もっとも開けざるは家畜の飼養なり。西洋諸國にては、いっぱんに、穀草、牧草などの栽培と、家畜の飼養とをあはせ行ひ、栽培によって得たる收穫は、多く、家畜の飼料に供すれども、わが國にては、古來、家畜を飼養すること、はなはだ少く、したがって、とくに、家畜の飼料に供するがために栽培するもの、きはめて少し。これ、わが國は、四面、みな、海に沿ひ、魚貝類の供給ゆたかなれば、國民、いっぱんに、これを食して、鳥獸の肉を食することの少きと、主として、耕種の農業と、養蠶とを行へるがために、衣服の原料を綿、麻、または、繭にもとめて、家畜の毛にも

とむることの少きとによる。
要するに、わが國の農業は、いまだ現今のまゝにては滿足すべからず、ます〱發達せしむべきこと多し。耕作地の面積廣大なるがごとくなれども、わが國總面積の、約一割五分にすぎずして、多くの西洋諸國が、その總面積の二割乃至五割なるに比すれば、なほ、はなはだ狹小なりといふべし。われらは、荒地を開墾して、ます〱美田良圃を增加せざるべからず。また、穀草の收穫多量なるがごとくなれども、農夫の中には、なほ、舊來の栽培法を固守し、ただ、氣候の和順を賴むもの多し。われらは、學理を應用して、栽培法を改良し、ます〱、收穫を增加せ

ざるべからず。ことに、家畜の飼養は、前にいへるがごとく、もっとも開けざるがゆゑに、原野、海岸を利用して、大いに、これを盛にせざるべからず。これを盛にして、善良なる、耕作用の牛馬、健全なる、軍用の馬匹、滋養に富める乳、肉などを供給することは、じつに、今日の急務なり。
世には、農業をもって、賤しき職業のごとく思へるものあり。これ、大いなる誤解なり。農業は、われらが生活に必要なる材料を作り出す業にして、じつに、諸職業の本源なり。しかのみならず、農業に從事するものは、多く、野外にありて、清潔なる空氣を呼吸し、四肢の運動よろしきにかなふがゆゑに、身體、つねに健全にして、長壽を保つこ

とを得べし。わしんとんが「農は、人の職業中、もっとも健全、もっとも高貴にして、また、もっとも有益なるものなり。」といへるはうべならずや。

第三課　船津傳次平。

近世の老農の中にて、技倆、功績の、もっともすぐれたるものは船津傳次平なり。當時は、學理、いまだ開けず、老農と稱せらるゝものも、手加減と目分量との經驗を賴とするのみなりしに、傳次平はこれを不可なりとして、實驗に加ふるに、學理をもってし、大いに、農事の改良を唱へ、あまねく、全國をめぐりて、いたる所、農業者のまどひを解き、わが國の農事をして、しだいに、改良の道に向はしめ

たり。

傳次平が、はじめて、世に知られしは、駒場農學校、すなはち、今の東京帝國大學農科大學の新設せられし時なり。そのころ、農事改良の先導者たるべき農學者は、おほむね、年、なほ若く、實地の研究、なほ足らざりしかば、一人として、傳次平の指導を仰がざるはなかりき。されば、學理と實驗とを和して、わが國農事の發達のもとゐを開きたるは、じつに、傳次平の力なりといふべし。

傳次平は、天保三年、上野の國勢多郡富士見村に生れたり。幼き時より、父の教訓を守りて、みづから、鋤、鍬をとりて、耕耘、栽培に從事せり。また、餘暇には、父につきて、和漢

の學と數學とを修めしが、數學には、ことに熟達したりき。傳次平が世の老農と異なる根柢は、じつに、こゝにあるなり。傳次平は、みづから求むるにはあらざりしが、その名、しだいに揚りて、村民の、大總代名主たらんことを請ふことしきりなりしかば、辭することをえずして、つひに、その職に就きたり。かくて、その村を治むること、はなはだ親切なりしかば、村民、みな、その德に服しき。時の內務卿、大久保利通これを聞き、あげて、駒場農學校の農場監督の事を囑託し、かつ、廣く、全國農事の改良のことにあたらしめたり。これ、明治十年のことにして、傳次平が四十六歲の時なり。

駒場の野は、もと、地味惡しく、惡草はびこれる所にて、その開墾、きはめて困難なりしが、傳次平の技倆と熱心とは、つひに、この荒野を化して、良圃となしたり。

この後傳次平は農商務省に奉職し、さらに、農事試驗場に轉じて、技師に任じ、正七位に叙せられ、年來の功によりて、藍綬褒章を賜はりたり。すでにして、故鄕に歸りし後も、なほ、農事に力をつくしたりしが、明治三十一年、六十六歲にて死せり。

傳次平、人となり勤勉にして、業に倦まず、勞を厭はず、栽培、養蠶のことより、盆栽、割烹などのことにいたるまで、一として、精通せざるはなかりき。その講話を筆記した

るもの、または、印刷したるものは、人々爭ひ求めて、研究に資せり。

第四課　人力車の發明。

人力車は、明治の初年、高山幸助、和泉要助、鈴木德次郎らが、はじめて製造したものである。

しかし、そのころの人力車は、現今用ひてゐるよーな、完全なものではなくて、ただ、輦臺の上に、四本の柱を立て、その左右と後とに、簾を下げ、蓋を設けて、それに車をつけたものであった。そして、雨降などには、油紙などをおほって、やうく、それを凌ぐのであったが、その後、内田勘左衛門が母衣をつけることを工夫し、秋葉大助が、さらに、種

種の改良を加へて、つひに、現今用ひてゐるよーなものになったのである。

秋葉大助は東京の人である。はじめ、武器、馬具の製造に從事し、諸大名の屋敷に出入してゐたが、明治の初年、はじめて、西洋から、馬車を輸入してきたので、機敏にも、これを買ひ入れて、乘合馬車の營業を開き、多くの人夫を雇って、東京と川崎との間を往復した。しかるに、まもなく、人力車が發明されて、大いに、世に行はれさうなのを見て、さらに、業を轉じて、大きな人力車製造場を開き、多くの職工を雇って、盛に、その製造に從事した。

そのころ、輦臺の上に、四本の柱を立てることは、すでに

改良されて、今のよーな箱とすることゝなったが、大助は、ます〱、車體の改良をはかって、まづ馬車にならって、蹴込を設け、ついで、車體の動搖を少くするために、車軸の上に、ばねをつけ、乘ごこちをよくするために、車體の內側に、布や革を張るなど、大いに輕便にして、實用に適するよーにした。

さて、大助はこれに人を乘せ、みづからひいて、東京と川崎との間を往復して、その工合を試み、かたはら、世人の注意をひくなど、熱心に、その流行をはかったので、それを用ひるものが、しだいにふえてきた。また、大坂にも、支店を設けて、その製造品を販賣させてゐたので、それを用

ひるものが、關西地方にもふえてきて、製造がまにあはないくらゐであった。

それから、年を追って、ます〱流行してきて、今では、どんな山間でも、いやしくも、道路の通じてゐる所には、ほとんど、これを見ない所はないくらゐになった。ただに、國內ばかりではなく、東洋の大都會、開港場などには、これを用ひない所はないほどである。

今の世に行はれてゐる交通機關は、多く、外國人の工夫したものであるが、この人力車ばかりは、わが國人の工夫したものである。もとより、進んだ工夫ではないが、明治の初年の工夫としては、注意すべきものといはなけ

ればならない。

第五課　なぽれおんのろしや遠征。

なぽれおんは、西暦千七百六十九年、地中海中のこるしか島に生れぬ。ふらんすに、革命おこりたるとき、革命黨にくみして、しば〳〵、大功を立て、二十七歳のとき、いたりやを征し、ついで、えじぷとを征して、ともに、大勝をえたり。なぽれおんの威名、これより大いにあがりて、三十歳のときには、第一統領となり、三十五歳のときには、つひに、皇帝の位につきたり。

それより、なぽれおんは、大いに、諸國を征せしが、みな、その鋒先にあたることあたはず、あるひは、領土を割き、あ

るひは、王位を譲り、あるひは、同盟國を組織して、その保護をあふぐにいたれり。かくて、よーろっぱ全洲の權力は、二三の國を除きては、ほとんど、その手に歸し、なぽれおんの威勢はその極度に達したり。しかるに、ある、意外の敗亡より、その運命、にはかに一轉せり。意外の敗亡とは何ぞ。ろしや遠征の不結果これなり。

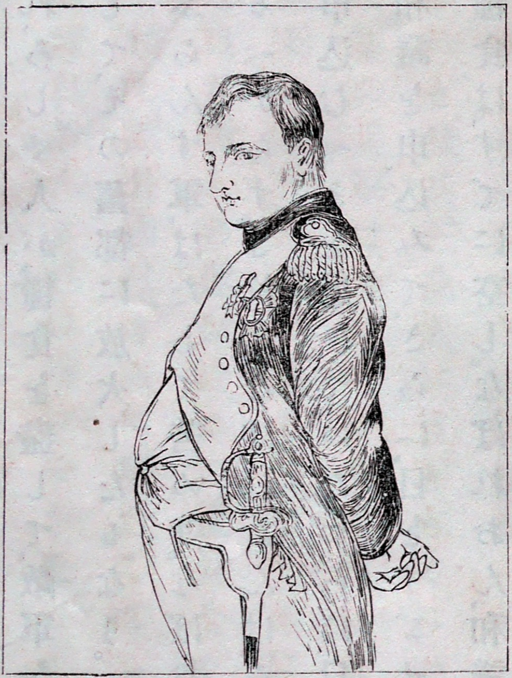
これよりさき、なぽれおんは、強敵、いぎりすを苦めんとし、大陸諸國に命じて、これと交通を絶たしめたり。ろしや、また、これを盟ひぬ。しかるに、まもなく、この盟を破りしかば、なぽれおん、大いにいきどほり、西暦千八百十二年五月、兵四十五萬をひきゐて、ろしやのもすこー市に

向ふ。ろしや軍これをむかへ撃ちて利あらず。されど、隊伍を乱さずして、もすこーに退けり。なぽれおんこれを追ふ。

九月十四日、もすこー市の尖塔(せんとー)、圓閣、宮殿など、はるかかなたにそびゆるを望めり。なぽれおん、喜んで「壮麗なるもすこー市、まさに、わが手に落ちんとす。」といふ。すでに、その市にいたれば、全市、三十萬の民、去って、影を留めず、街路寂莫(せきばく)たり。全軍、事の意外なるにおどろく。なぽれおん本陣を、くれむりん宮殿におき、全軍を分ちて、市内の各所によらしむ。

その夜、市内に、火起れり。されど、大事にいたらざりしが、

翌夜、また、所々に起り、をりから吹き出でたる烈風のために、やうやく、各方へもえひろがり、紅炎天を焦して、猛火全市を包みたり。



崩るゝ物音、はじくる響、人の叫びわめく聲と合して、惨状(さんじょー)いはんかたなし。ふらんす軍、必死となりて、消防につとむれども、風、ます〳〵烈しく、火、ます〳〵盛にして、くれむりん宮殿、また、火の近づくところとなりぬ。なぽれおん、

走って、市外に出で、ぺとろぶすきー宮殿にとどまる。延燒四晝夜、一萬二千戸を燒き盡して、火はじめて消えぬ。これ、ろしや人が、糧食を盡して、敵軍を苦めんとし、意を決して、その舊都に放火したるなり。

ふらんす軍は、はたして苦めり。なぽれおん、今は退軍せざるべからず。されど、なぽれおんは、ろしや皇帝の和議を申込むべきを思ひて、いたづらに日をすごし、みづから、和議を申込みて、さらに、日をすごせり。季は嚴寒に入り、糧食は、すでに空し。なぽれおん、和議の成りがたきを見て、十月十九日、つひに退軍す。從兵、わづかに十二萬人。ろしや軍、勢をつくして、これを追ふ。ふらんす軍の死傷、

はなはだ多し。されど、退軍の困難、さまではなはだしからざりしが、十一月七日、恐ろしき大吹雪ありて、道路の方向、地勢の險易、さらに知るべからず、凍死、餓死、戰死、あひつぎ、殘兵三萬人にすぎざるにいたれり。しかも、ろしや軍の追擊は、ます〱急なれば、なぽれおんは、つひに、殘兵をすてて、そりに乘りて、ぱりーに急行せり。

なぽれおんの運命は、この意外なる敗亡によりて、全く一轉し、諸外國は、さらに聯合して、ふらんすにせまれり。なぽれおんこれに敵するあたはず、つひに、帝位よりおとされて、こるしか島の東なるえるば島に流されたり。かくて、こゝにあること十箇月、ふたゝび、ふらんすに入

りて、皇帝となりしが、西暦千八百十五年、わーてるろーの戰に大敗し、また、帝位よりおとされて、大西洋中のはなれ島、せんとへれなに流されたり。かくて、こゝにあること六年、年五十三にて死せり。

第六課　太陽ト月。

太陽ト月トハ、ソノ大キサ、ホトンド、アヒ等シキガゴトク見ユレドモ、ジツハ、大イニ異ナリ。太陽ノ直徑ハ三十五萬里餘ニシテ、地球ノ直徑ノ、オヨソ百九倍アレドモ、月ノ直徑ハ八百八十六里餘ニシテ、地球ノ直徑ノ、オヨソ四分ノ一ニスギズ。シカルニ、カク、アヒ等シキガゴトク見ユルハ何故ゾ。コレ、太陽ハ地球ヲサルコト、平均、オ

ヨソ三千八百萬里ノ遠キ所ニアレドモ、月ハ平均、オヨソ九萬七千八百里ノ所ニアレバナリ。今、一時間三十マイルノ速度ヲ有スル汽車ニ乘リテ、太陽ヲ一周ストセバ、ジツニ、十年餘ノ長キ日月ヲ要スベシ。ソノ大ナルコト、推シテ知ルベシ。

太陽ハ非常ノ高溫度ヲ有スル火球ニシテ、强キ光ト熱トヲ、地球ニ送ル。コノ光ト熱トハ、ワレラノタメニハ、キハメテ重要ナルモノニシテ、モシ、コレナキトキハ、地球上ノ生物ハ、一日モ生存スルコトアタハザルナリ。

月ハ冷却シハテタル球ニシテ、弱キ光ヲ、地球ニ送ル。サレド、コノ光ハ、月ノ、ミヅカラ發スルモノニハアラズシ

テ、太陽ヨリ受ケタルモノヲ反射スルモノナルガユヱニ、ソノ强サ、太陽ヨリ、直接ニ來ルモノトハクラブベクモアラズ。

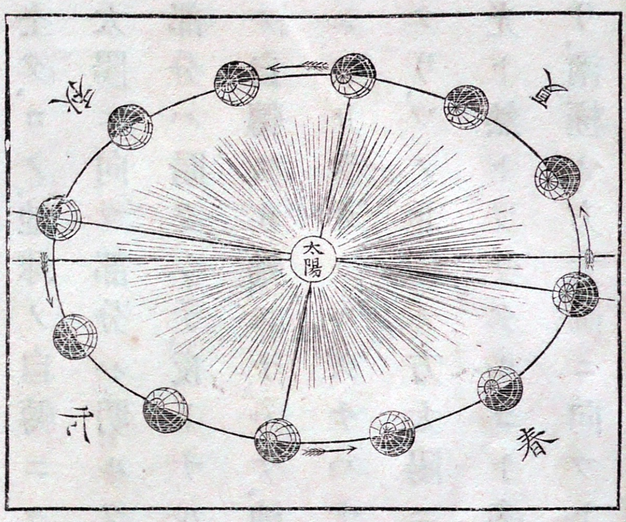
月ハ、天體中、モットモ、地球ニ近キモノナルガユヱニ、ソノ表面ハ、スデニ、ヨク觀測セラレタリ。表面ニハ、噴火口ノ跡トモ見ユルクボミアル、アマタノ、高キ山アリ、平野ト思ハルヽ所モアレドモ、水モナク、空氣モナク、シタガッテ、生物ノ生存スルコトナシ。

ワガ地球ハ太陽、月ト密接ナル關係ヲ有ス。晝夜ノ別、四季ノ變化ハ、太陽トノ關係ニヨリテ生ジ、月ノ盈虧(ミチカケ)、日蝕(ニッショク)、月蝕(ゲッショク)ハ、太陽、月トノ關係ニヨリテ生ジ、マタ潮ノ滿干(ミチヒ)ハ、

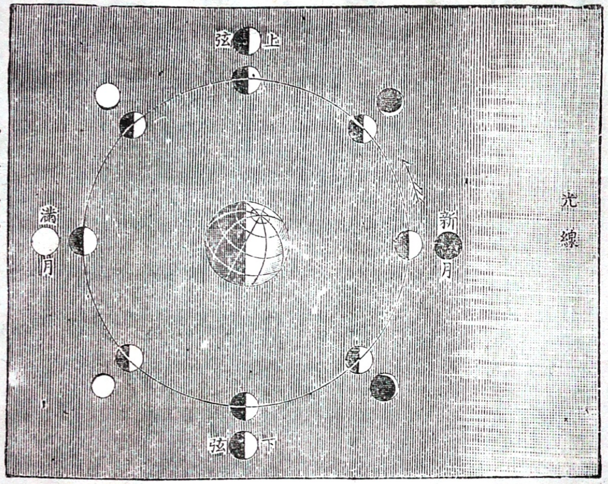
オモニ、月トノ關係ニヨリテ生ズ。

地球ハ、一日ニ一回自轉シツヽ、ホトンド一定セル軌道(キドー)ヲ作リテ、一年ニ一回、太陽ノ周圍ヲ公轉ス。晝夜ノ別ハ、全ク、コノ、地球ノ自轉ニヨリテオコル。スナハチ、地球ノ太陽ニ向フ部分ハ明ルクシテ、晝トナリ、コレニソムク部分ハ暗クシテ、夜トナルナリ。マタ、四季ノ變化ハ、地球ノ自轉スル軸、スナハチ、地軸ノ、軌道面ニ垂直ナラザルニヨリテオコル。スナハチ、地球ノ太陽ヲ公轉スルニアタリ、ソノ北極ノ方太陽ニ向フトキハ、北半球ハ、太陽ノ光ト熱トヲ受クルコト多キガユヱニ、暑クシテ、夏トナリ、南極ノ方太陽ニ向フトキハ、北半球ハ、太陽ノ光ト熱

トヲ受クルコト少キガユヱニ、寒クシテ、冬トナルナリ。春ト秋トハ、ソノ中間ノ時ニシテ、氣候温暖ナリ。



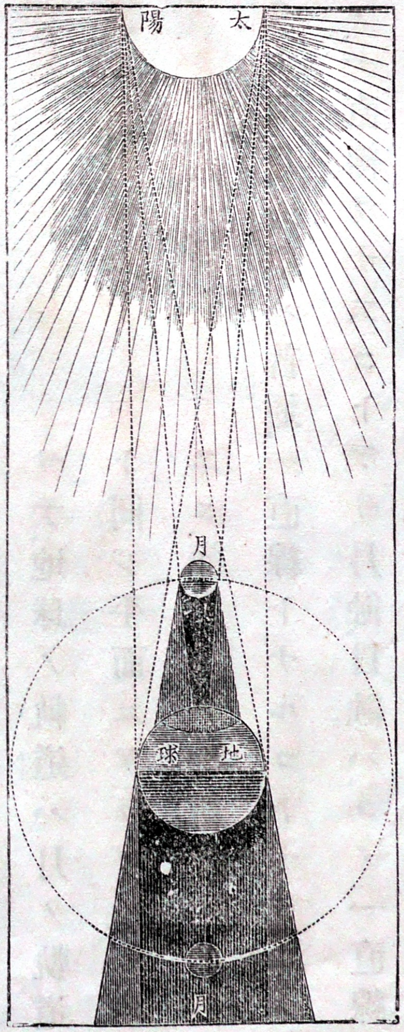
月ハ、自轉シツヽ、ホトンド一定ノ軌道ヲ作リテ、地球ノ周圍ヲ運行シ、地球ノ公轉ニシタガヒテ、マタ、太陽ノ周圍ヲ運行ス。月ノ盈虧ハ、地球ノ位置ニヨリテ、太陽ニ照サルル月ノ半面ノ、ワレラニ見ユルニ、多少アルニヨル。スナハチ、月ト太陽ト、アヒ對スル間ニ、地球ノアルトキハ、月



ノ照サルヽ、半面、全ク見エテ、滿月トナリ、地球ト月ヲ間ニオキテ、太陽ト、アヒ對スルトキハ、月ノ照サルヽ半面、全ク見エズシテ、新月トナルナリ。

サテ、地球ノ軌道ハ月ノ軌道ト同ジ平面ニアラザルガユヱニ、滿月、マタハ、新月ノトキニテモ、太陽、月、地球ハ、普通、一直線トナルコトナシ。サレド、マヽ、一直線ヲナスコトアリ。月蝕、日蝕ハ、コノ一直線ヲナストキニオコル。スナハチ、滿月ノトキ、一直線トナ

ルトキハ、月ハ、地球ノタメニ、光ヲ受クルコトアタハズシテ、月蝕ヲ生ジ、新月ノトキ、一直線トナルトキハ、地球ノ一部ハ、月ノタメニ、太陽ヨリ來ル光ヲサヘギラレテ、日蝕ヲ生ズルナリ。

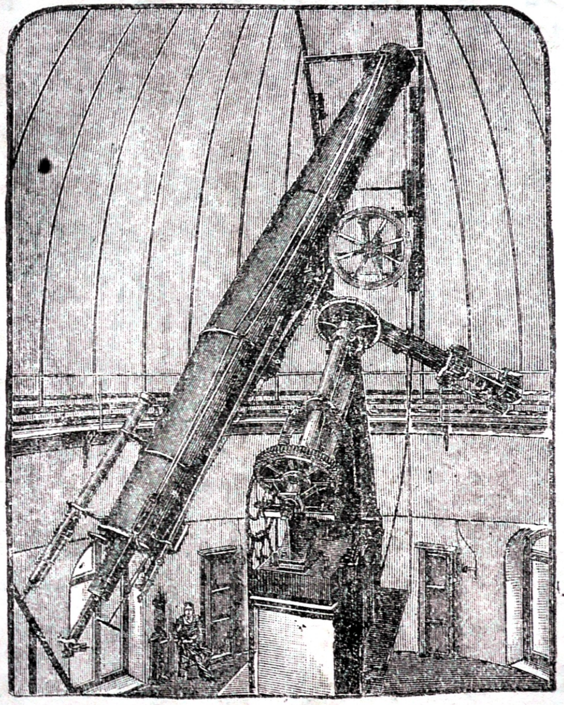


太陽、月、地球ハ、モトヨリ、ソノ他ノ天體モ、タガヒニ、ソノ引力ニヨリテ引合フモノナリ。中ニモ、月ハ、ソノ位置、モットモ地球ニ近キガユヱニ、ソノ地球ニ對スル引力、ハナ

ハダ強シ。潮ノ滿干(ミチヒ)ハ、オモニ、コノ、月ノ引力ニヨリテオコルモノニシテ、海水ノ月ニ對スル部分ハ、高マリテ、滿潮トナリ、ソノ反對ノ部分モ、同時ニ、滿潮トナリ、ソノ中間ノ部分ハ干潮トナルナリ。

第七課　望遠鏡(ぼーえんきょー)と顯微鏡(けんびきょー)。

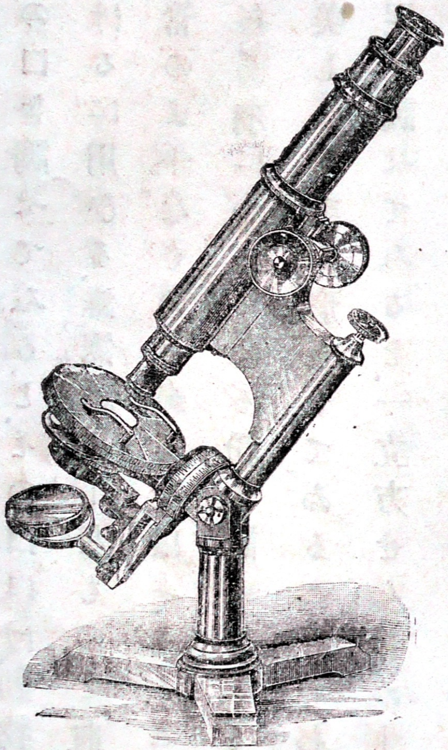
望遠鏡(ぼーえんきょー)は、ごく遠い所にある物體を、近い所に見ることのできる器械で、今から、およそ三百年前、おらんだ人、めちうすが、はじめて發明したものである。はじめは、はなはだ不完全なものであったが、いたりやの星學者、がりれおが、これに種々の改良を加へたので、つひに、星學の研究に使用することができるよーになった。がりれおは、こ



れをもって、天體を觀測して、そのころ、まだ知れてゐなかった、種々の事實を發見した。太陽の表面に、斑點のあること、月の表面に、山のあることなどは、みながりれおが發見したのである。

その後、望遠鏡は、ぜんじ改良されて、その構造が精巧になるとともに、その効用も、大いに増してきたが、近時、星

學が、非常に進んで、天體の觀測が、いよ〱緻密になり、新しい天體も、多く發見されることになったのは、全く、望遠鏡のおかげである。



望遠鏡とならんで、精巧を爭ふものは顯微鏡である。顯微鏡は、ごく小さいものを、大きく見ることのできる器械で、望遠鏡の發明後、まもなく發明されたよーである。いま、これをもって、

蚊の口を調べてみると、その口には、動物の皮膚に、穴をあけるに用ひる、錐鋸のよーなものと、血を吸ふに用ひる、管のよーなものとがそなはってゐることがわかり、ちょーちょの羽についてゐる粉を調べてみると、その粉は、みな、美しい羽毛の形をしてゐることがわかる。また、海底の泥を調べてみると、一立方せんちめーとるの中に、およそ十一萬六千の動物が生活してゐることがわかり、粘土を調べてみると、一立方せんちめーとるの中に、およそ百五十億の化石のあることがわかる。近時、細菌學が、大いに開けて、特殊の形質をもってゐるばくてりやが、種々の傳染病の病源となることが明かになったのは、全

く、顯微鏡のおかげである。

第八課　ぴらみっど。

えじぷと太古の文明の
面影殘るぴらみっど、
ないるの岸のをちこちに、
山かとばかり聳えたり。」
山と見ゆれど、ぴらみっど、
石もてたゝみ築きたる、
方錐形の塔にして、
大小、およそ七十基。
「大なる一基築くには、

十萬人の、たゆみなく、
三十年もかゝりてぞ
成しとぐべき。」と、世にはいふ。」
そも、この塔はえじぷとの
國王一家の墓にして、
その墓ごとに、石柩を、
地下のむろにぞをさめたる。」
石柩中のなきからは、
三千年後の今も、なほ
くづれ、くされず、そのまゝに、
みーらとなりて殘るとぞ。」

第九課　すたんりー、りびんぐすとんのゆくへをさがす。(一)

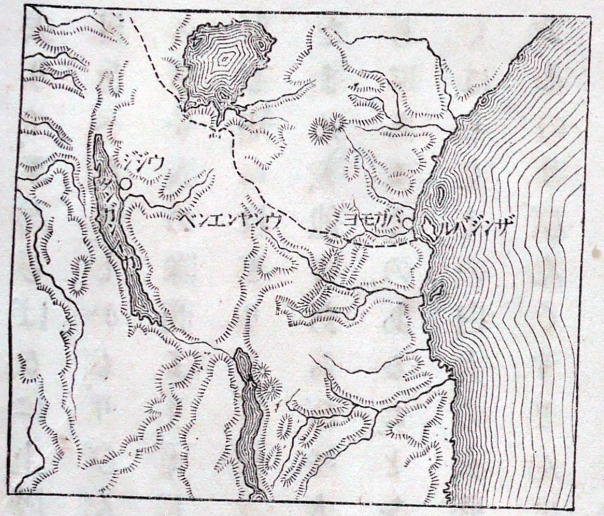
あふりか大陸は、その內地の地理明かならざるがために、暗黑大陸と稱せらるゝこと久しかりしが、今より五十餘年前、いぎりす人、りびんぐすとんの探檢せしより、その地理、やうやく明かなるにいたれり。

りびんぐすとんの探檢せしは前後三回にして、第一回、第二回には、その消息、時々、よーろっぱ、あめりかの諸國に傳はりしかども、第三回には、絕えて聞えざること五年におよびたり。されば、世には、「りびんぐすとんは、すでに死せり。」と思ふものすらありき。

かゝりしほどに、いぎりす人、すたんりーは、あめりかの、ある新聞社の依頼によりて、りびんぐすとんのゆくへをさがさんとて、あふりかさして出發せり。

すたんりーは、ほどへて、あふりかの東海岸に近きざんじばる島に上陸し、こゝに、多くの日數を費して、種々の準備をなし、さらに、ばがもよにて、人夫をやとひ入れ、隊商をつくりて、いよ〳〵、内地にわけ入りたり。

もとより、未開の熱帶地方のことなれば、一行は、しばしば、毒草しげれる藪をわけ、死骸横はれる、疫病の流行地を過ぎぬ。毒虫多き野べに宿り、泥深き沼をとほり、水みなぎれる川を渡りぬ。しかのみならず、盜賊の難にあひて、多くの貨物を失ひしことあり、酋長の脅迫にあひて、迂廻せる途をとりしことあり。また、その間には烈しき疫病にかゝりて苦むもの、死するもの、勞苦にたへずして、進行を怠るもの、暴行をはたらくものなどありて、すたんりーの心勞は、まことに一方ならざりき。いはんや、すたんりー、みづからも、しば〳〵、熱病にかゝりたるをや。



かくて、道すこしもはかどらざるに、日は、いたづらに過ぎ

去りて、ぎんじばるに上陸せし時より、すでに、二百八十日をへたり。しかも、りびんぐすとんにつきては、途中、あらびや人の隊商より「うじゝにあり。」と聞きしほかは、何事も知られざりき。

たま〳〵、他の、あらびや人の隊商にあひて、白人の、うじじにあるもののあることを聞けり。よりて、すたんりーは、くはしく、その白人の衣服、年齢などをたづねて、いよいよ、そのりびんぐすとんに相違なきことを確めたり。

すたんりーは、大いに勇み立ちしが、かく、道の手間取りては、そのうじゝに到着したらん日の、やがて、りびんぐすとんがその地を去りたる後なるべきことを思ひて、心のいらだつこと一方ならず、思はずも「あー。汽車はなきか。馬はあらざるか。飛んでいたらん術もがな。」と叫びたりとぞ。されど、ゆくてには、なほ、種々の障礙横はれり。

第十課　すたんりーりびんぐすとんのゆくへをさがす。(二)

泥地は駄馬の足を沒し、尖れる草は人の皮膚を傷つけ、酋長は、多くの物品を求めて、もしきかざらんには、たちまちたゝかひすべき勢なり。かゝる障礙を排しつゝ、やうやく進み〳〵て、さきに、隊商にあひし日より九日目、高き岡の上にいたりて、眼下に、たんがんいか湖を見おろすことをえたり。湖面、鏡のごとくすみわたり、湖岸の

椰子樹、しづかに、影をうつせり。椰子樹の間には、人家隱見せり。あー。この人家ある所こそ、すなはちうじゝなれ」すたんりー、すなはち、命を下して、國旗をかゝげ、銃を放たしむ。あめりかの國旗は、高くかゝげられ、銃は、一齊に放たれて、谷より谷にひびきわたりぬ。

うじゝの人々は、これを聞きて走せ來れり。中に、りびんぐすとんの從者あり、進み出でて、英語にて挨拶す。すたんりー、この從者より、りびんぐすとんの、なほ、この村にあることを聞きて、大いに喜び、岡を下りて進み行けば、一人の白人、多くのあらびや人に圍まれて立てり。色あをじろく、體瘦せ、ひげ、ことごとく白し。頭には、綠色の布帽子をかぶり、身には、袖赤き上着に、鼠色のずぼんを着けたり。

すたんりーは、いそぎ歩み寄り、帽子をとりて「御身はりびんぐすとん博士におはさずや。」といへば、かの白人は、ゑみを浮べながら、帽子をとりて「しかり。」と答ふ。すなはち、來意を告げけるに、やゝ信ぜざるものゝごとくなりき。されど、本國なる家族、知己より託せられたる、多くの封書を渡しければ、やうやく、その事實を信じて、喜ぶこと限なく、すたんりーを、周圍に立てるあらびや人に紹介して、家に伴ひたり。

さて、二人は座につきて、談話に、時を移しき。りびんぐす

とんは、すたんりーより、よーろっぱにおこりし出來事の數々を聞きて、今さらに、おのれが文明世界に遠ざかれることの久しきを感じ、また、すたんりーは、りびんぐすとんより、その經來りし冒險の數々を聞きて、はじめて、おのれが旅行の困難の物にもあらざりしことを悟れり。やがて、樂しく、晩餐をともにせしが、すたんりーは、旅の疲をおぼえければ、まづ、辭して、眠につき、りびんぐすとんは、燈火のもとに、なつかしき家族、知己の封書を開きぬ。夜は、しん〱とふけわたりて、聞ゆるものは、ただ、たんがんいか湖の波の音と、草むらになく虫の聲々とのみ。

かくて、長き間、二人は、たがひに、語り殘せるところを語り合ひ、また、あたりの地理を探檢せり。されど、すたんりーは、長く留るべからず。すみやかに事の顚末を報告せざるべからず。よりて、りびんぐすとんにすゝめて、「ともに歸りたまへ。」といふ。されど、「探檢をふるまでは。」とて承諾せざりければ、りびんぐすとんの、地理學會に宛てたる通信、家族、知己に宛てたる封書を受取り、うんやんえんべまで、ともにいたり、多くの貨物を殘し置きて、つひに、なごりをしき別を告げぬ。かくて、ふたゝび、幾多の困難をおかして、ぎんじばるに着し、ただちに、いぎりすへ向へり。

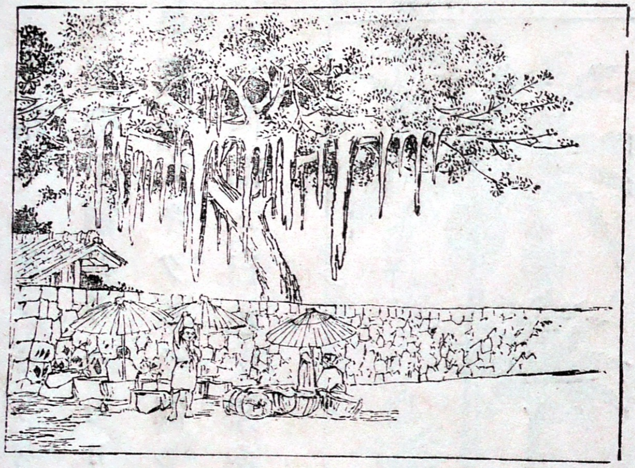
そのいぎりすに着したる時、人々は、いたる所にて、盛に歡迎しびくとりや女皇は、とくに、貴重なる物品を贈りて、その勞を謝したりとぞ。

第十一課　熱帶植物。

熱帶地方ノ植物ハ、ソノ種類、ハナハダ多ク、成長、繁殖モ、マタ、キハメテ盛ナリ。コトニ、インド、ジャバノゴトキ、雨量ノ多キ所ニハ、廣大ナル森アリテ、種々ノ長大ナル樹木、スキマナキマデニ生ヒ茂レリ。シカシテ、ソノ幹枝ニハ、無數ノ蔓(ツル)植物、縄(ナハ)ノゴトクカラミカヽリ、蘭(ラン)類、シダ類、苔(コケ)類ナドモ、トコロエガホニ着生セリ。

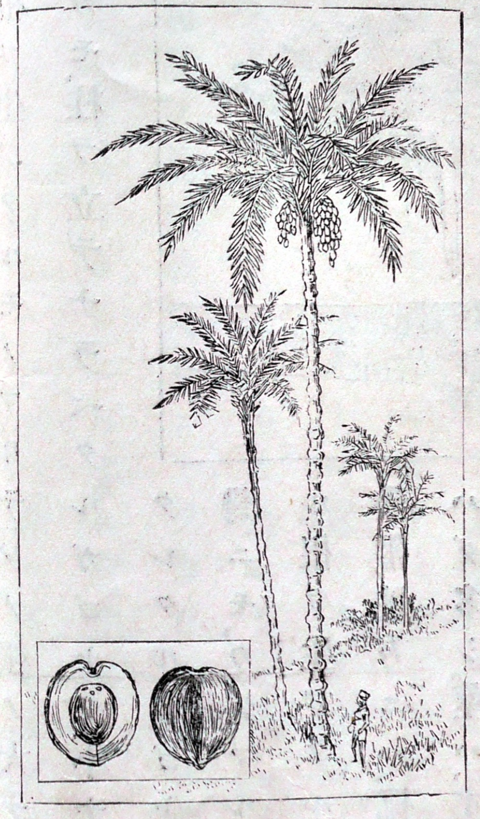
コレラノ樹木ノ中ニハ、幹ノ高キ所ヨリ、大小アマタノ

根ヲ生ジタルモノアリテ、ソノ根ノ大ナルモノハ、アタカモ、柱ヲ立テナラベタルガゴトク、小ナルモノハ紐(ヒモ)ヲタレタルガゴトシ。ワガ琉球、臺灣ニモ、ガジマルトイヒテ、カヽル根ヲ生ジタル樹木アリ。



熱帶地方ニハ、椰子(ヤシ)樹ノ類、ハナハダ多シ。莖ハ、オホムネ直立シテ、マヽ、百餘尺ニ達シ、葉ハ大ニシテ、コマカク分レ、莖ノ高キ所ヨリ群リ出デタリ。椰子樹ノ類中、モットモ主ナルモノハ、コヽ椰

子ト稱スルモノナリ。インド、ジャバ地方ノ海岸ニ生ジ、大ナル椰子樹林ヲナセリ。ソノ葉ハ、スコブル大キク、ソノ果實ハ、大キクシテ圓シ。果實ノ外部ハ堅キ殼ニテオホハレ、内部ニ、白色ノ果肉ト、カラリヨキ乳ノゴトキ液ト



アリ。コノ液ハ飲用トスベク、果肉ヨリハ、油ヲシボルベク、殼ニテハ、コップ、マタハ、種々ノ器具ヲ製スベ

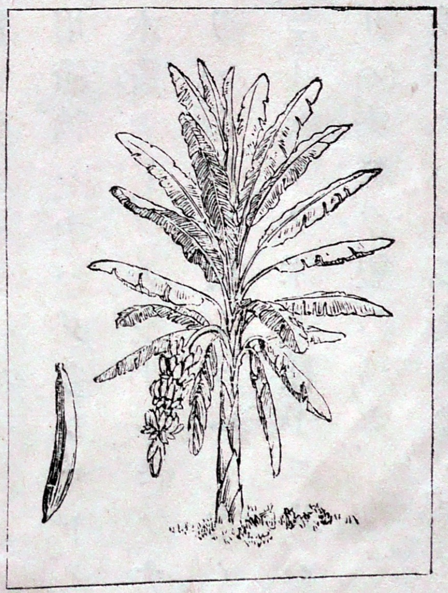
シ。

椰子(ヤシ)樹ノ類ニ、マタ、籐(トー)トイフモノアリ。インド、ジャバナドニ、モットモ多ク生ジ、ワガ臺灣ニモ生ズ。莖細クシテ、長ク延ビ、森林ノ樹木ニカラミカヽリテ、マヽ、數百尺ニ達スルモノアリ。切リ取リテ籃(カゴ)類ヲ製スベシ。

熱帶地方ニハ、ソノ他ノ有用植物、ハナハダ多シ。サトーキビ、ゴムノ木、コーヒーノ木、藍(アヰ)ナド、ソノ主ナルモノナリ。サトーキビノ莖ノ汁ヨリハ、砂糖(サトー)ヲ製シ、ゴムノ木ノ幹ノ汁ヨリハ、ゴムヲ製シ、コーヒーノ木ノ種子ヨリハ、コーヒーヲ製シ、藍ノ葉ヨリハ、染料ヲ製スベシ。

マタ、食用果實ヲ生ズル植物、ハナハダ多シ。バナナ、アナ

ナスナド、ソノ主ナルモノナリ。バナナハ芭蕉(バシヨー)ノ類ニシテ、廣ク、熱帶地方ニ培養セラレ、ワガ琉球、臺灣、小笠原島ニモ、多ク産ス。アマタノ變種アレドモ、葉ト莖トハ芭蕉ニ似テ、ハナハダ大キク、果實ハ胡瓜(キウリ)ニ似テ刺(トゲ)ナク、カツ、厚キ皮アリ。果肉ハ澱粉(デンプン)多クシテ、味ヨロシ。



アナヽスハ、莖、ハナハダ短ク、葉長大ニシテ、一所ヨリ群リ出デ、中ニハ刺(トゲ)アルモノアリ。果實ハ、松ノ實ニ似テ大

キク、赤色ヲオビ、上部ニ葉群アリ。果肉ハ、味、ハナハダ甘クシテ、香氣强シ。

第十二課 ころんぶす。(一)

今から、およそ四百年前、よーろっぱ諸國は、盛に、外國貿易を營んで、その都市は、大いに繁榮した。ことに、いたりや人は、あじや貿易を一手に占めて、いんど地方に産する、種々の貴重な商品を、全よーろっぱ諸國に供給してをったので、當時、べにす、ぜのあは、その富において、じつに世界無比であった。

しかし、これらの商品は、たいてい、あらびや人が、いんど地方から、しりや、えじぷとなどの地方に運んで來て、そ

こに居る、いたりやの商人におろすのであったから、その價は、非常に高かった。したがって、「直接、いんどに行ける航路を開きたい。」といふことは、よーろっぱ諸國いっぱんの希望であったのである。

ぽるとがるの皇子、へんりーは、どうかして、この希望を達しようと思って、當時、あふりか大陸が、どのくらゐまで、南へのびてをるか知れてをらなんだにもかゝはらず、これを廻航しようと企てた。しかるに、こゝに、また、「あふりかを廻航するのよりも、もっと近い航路を開かう。」と企て、思ひがけもない大陸を發見した人がある。これが、すなはちころんぶすである。

ころんぶすは、いたりやのぜのあの人である。少年のときから、航海に從事し、多年、地中海を航してをったが、三十一二歳のころ、ぽるとがるのりすぼんに移った。りすぼんには、へんりーの建てた航海學校、天文臺などがあって、航海術が、大いに進歩してをったからである。

ころんぶすは、りすぼんにあるあひだ、あるひは、あふりかの近海を航し、あるひは、地圖、海圖を作って、生計を立て、もっぱら、地理學を研究した。その結果、つひに、「地球は水と陸とからできてをって、球のよーな形をしてをるものである。もし、東から西へ向って、一直線に航すると、きっと、いんどの東端に達するであらう。また、その間には、めづらし

い島々もあるであらう。」と考へた。この「島々。」といふのには、わが日本をも含んでをる。ころんぶすは、まるこ、ぽろといふ人の紀行文を讀んで、「あじやの東には、ちばんごー(日本)といふ島があって、金銀、財寶が到る所に滿ち〱てをる。」といふことを、かたく信じてをったのである。

ころんぶすの說は、もとより「ことごとく正しい。」とはいへん。いんどの東端をよーろっぱの對岸にあるよーに考へ、その間が、ごく近くて、これを航する方が、あふりかを廻航するよりも、はるかに近道であるよーに考へたなどは、全く誤である。しかし、當時、地理學が開けんで、地球の形狀すら、まだ知れてをらなんだときに、ひとりかう

いふ說を唱へたのは、さすがに、卓見といはねばならん。

第十三課　ころんぶす。(二)

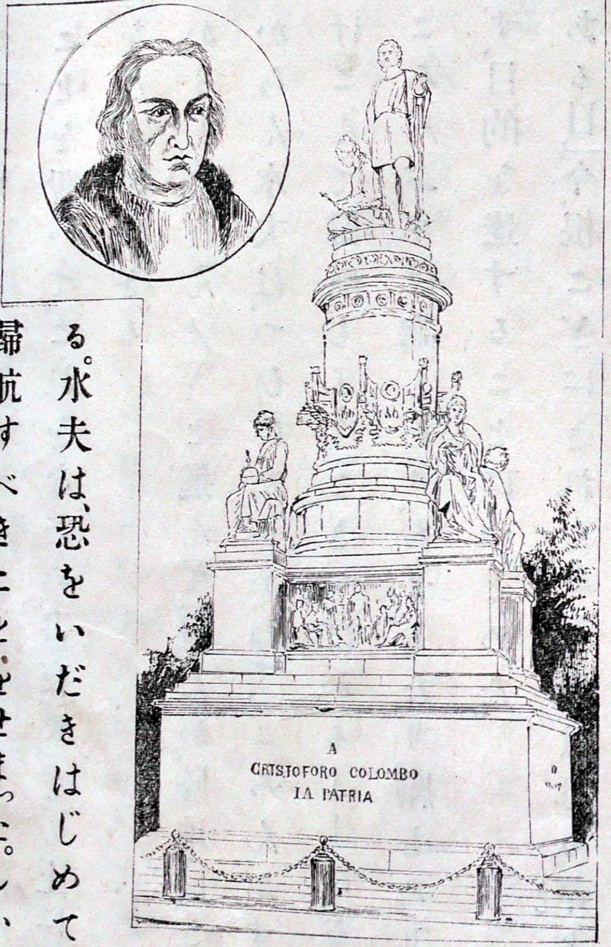
しかし、當時は、ほとんど、ころんぶすの說に、耳を傾けるものはなかった。誰も、ころんぶすを、空想にふけるものとしてあざけってをった。けれども、ころんぶすは、人々の嘲をかへりみず、ねっしんに、その說を主張し、航路を開かうと企てたが、つひには、多くの負債ができ、その日その日の生計にも困るよーになったので、しかたなく、いすぱにやさしておちて行った。

ころんぶすは、いすぱにやに行っても、なほ、ねっしんに、その企の實行をはかり、その補助をえることにつとめたが、

その說、ことに、その、地球の圓いといふ說には、やっぱり、耳を傾けるものがなかった。

このころのいすぱにやの皇后は、いさべらといって、よほど賢明な方であった。ころんぶすは、ある僧の紹介によって、この皇后に謁見し、くはしく、その說、その企を述べた。皇后は、大いに、これを嘉されて、その航海に要する、いっさいの費用を支辨すべきことを約束された。ころんぶすは、こゝに、はじめて、その企を實行する端緒を開くことができたのである。

西曆千四百九十二年八月、ころんぶすは、勇みに勇んで、いよ〳〵、いすぱにやのぱろす港を出帆した。船は三艘、



乘組はすべて百二十人であった。風が、つごーよく吹いて、船は、矢のごとく走って行く。來し方は、もはや、地平線の下にかくれて、行手は限も知れん青海原である。水夫は、恐をいだきはじめて、しきりに、歸航すべきことをせまった。しかし、ころん

ぶすは、ちっともさわがず、まもなく、目的の地に着くべきことを説いて、これをなだめ、晝夜、でっきの上に立って行手をながめてをる。

かうして、だん〳〵と進んで行ったが、陸地は、さらにみつからん。水夫は、つひにたへかねて、「ころんぶすを海に投げこんで歸航しよう。」とさへはかるよーになった。しかし、ころんぶすは、諭したり、おどしたり、勵ましたりして、たえず、目的を達することにつとめた。

ある日、「今、根こぎにされたか。」と思はれる葦と、果實のついてをる枝とが船に流れ寄った。斧のあとのある板、刃物で彫刻した杖なども、波のまに〳〵流れて來た。ころん

ぶすはもとより、水夫らは、やう〳〵、陸地の近くなったことを知って、大いに勇みたった。

その夜、ころんぶすは、行手はるかに、一點のともしびを認めたが、夜明ごろ、まっさきに進んでをる船から、どんと一發砲聲が聞えた。新陸地は、つひに發見されたのである。時は十月十二日、ころんぶすがぱろす港を出帆してから、七十一日めである。

第十四課　ころんぶす。㈢

美しい緑色の島は、今、眼前にあらはれた。水夫は、狂せんばかりにうち喜び、みな、ころんぶすの周圍に集って、これまでの無分別を謝した。畢生の大希望を達したころん

ぶすの喜は、はたして、どんなであったであらうか。

ころんぶすは水夫を隨へ、上陸して、その新陸地のいすぱにや皇帝の領地であることを宣言した。その陸地はぐあなはにといふ島であったが、ころんぶすは新に、さん、さるばどるといふ名をつけた。

ころんぶすは、ついで、きゅーば、はいちなどをも發見した。そして、さん、さるばどるや、これらの島々を、かねて考へてをったとほり、いんどの一部であると信じたので、そこの土人に、いんど人といふ名をつけた。この名は、誤った考でつけられたものながら、今、なほ用ひられてをる。

ころんぶすは、この發見の次第を報告するために、いったん、いすぱにやに歸航した。そのぱろす港に着いたとき、歡迎の人々から起った喝采は人を聾にするばかりであった。ころんぶすは、やがて、皇帝と皇后とに謁見したが、皇帝と皇后とは、大いに喜んで、貴い位や特權を與へて、その名譽を表彰された。

ころんぶすは、この後、第二、第三、第四回の航海をした。第二回には、多くの島々を發見し、第三回には、南あめりかのおりのこ河口を探檢した。しかし、これらの航海は、ころんぶすにとっては、みな、不幸な航海であった。ころんぶすについて渡航したものは、思のほかに、金銀、財寶のえられんばかりか、かへって、新殖民地の基礎を固めるために

勞働せねばならなんだので、ころんぶすのことを、あしざまに、本國に報告し、本國から派遣された使節は、ころんぶすを、鐵の鎖でしばって、本國に送り歸した。この鐵の鎖は、いさべらのなさけによって解かれ、ころんぶすは、さらに、第四回の航海をすることを許されたが、航海中、難船して、命からがら歸って來た。

ころんぶすは、六十歳のとき、いすばにやで死んだ。その子は、遺言によって、かつてしばられた鐵の鎖を、屍とともに、墓の中に埋めた。ころんぶすの晩年の歴史は、じつに、涙の歴史である。

ころんぶすの死に先だつこと數年、いたりやのあめりごといふ人が、數回、南あめりかの海岸を探檢して、これに關する、くはしい紀行を公にした。ころんぶすの發見した新大陸は、このあめりごの名によって、つひに、あめりかといはれることになった。

第十五課　ないやがら瀑布。

ないやがら瀑布はあめりか第一の大瀑布にして、あめりか合衆國の東北部にあるないやがら河にかゝれり。

すぺりおる、みしがん、ひゅーろんの三大湖の水、ことごとく、えりー湖に注ぎ、えりー湖の水、さらに、ないやがら河となりて流れ、河中のごーと島に到りて、分れて、二派となり、こゝに、二大瀑布をなす。これ、すなはち、ないやがら

瀑布にして、島の左にあるものは、かなだ國に接せるがゆゑに、かなだ瀑といひ、島の右にあるものは、あめりか合衆國に接せるがゆゑに、あめりか瀑といふ。

あめりか瀑は、幅千六十ふぃーと、高さ百六十七ふぃーとあり、かなだ瀑は、幅三千十ふぃーと、高さ百五十八ふぃーとあり。かなだ瀑は、一に、ほーす、しゅー瀑といふ。馬蹄鐵瀑の義にして、瀑の形狀によりて名づけたるなり。

そも〳〵、ないやがら河は、長さ、わづかに三十六まいるにすぎずして、河口の河源より低きこと三百三十ふぃーとなりといへば、水勢の、いかに急なるかを知るべきに、瀑布にては、水流、およそ、その半の高さある絶壁より、一

躍して深淵に直下し、その水量、一分間千五百萬立方ふぃーとにおよぶといへば、その勢の、いかに猛烈なるかを知るべし。

されば、その響、萬雷の、一時に落つるがごとく、水煙もーもーとして、白雲の上るがごとし。天氣うらゝかなる日は、日光水煙に映じて、七彩の虹をあらはし、美觀限なしといふ。

この瀑布は、ごーと島の、周圍の崖よりも見るべく、河の兩岸よりも見るべし。また、小蒸氣船にて、その近傍に到りても見るべし。この瀑布を見んとて、各地方より來るものは、年々四十萬人の多きにおよぶ。

河の右岸に、あめりか合衆國の町、ないやがら、ふぉーるすあり。この町は、もと、遊覽の客のために成れるものなれども、近時、河流を利用して、一大工業地たらんとせり。すなはち、瀑布の上の右岸より、短き運河を掘り、それに續けて、町の地下に、およそ一まいるのとんねるを穿ちて、水流を、瀑布の下の右岸に導き、その運河の落口に、水車を装置して、十五萬馬力ほどの水力を得るなり。しかも、瀑布の水量は、少しも、減じたるがごとく見えずといふ。

第十六課　地震。

昔ノ人ハ「地下ニ、大鯰（ナマズ）スミテ、ソノ頭ヲフリ、尾ヲ動カス時ハ、地震、タチマチ起ル。」ト考ヘタリ。サレド、今ハ、學問、大

イニ進ミテ、カヽル、愚ナル説ニハ、耳ヲ傾クルモノモナシ。

地震ノ原因ニ、三ツアリ。イマ、ソノ原因ニヨリテ、火山地震、ジスベリ地震、陷落（カンラク）地震ノ三ツニ分ツ。

火山地震ハ、多クハ、火山ノ破裂ニヨリテ起ル。寶永（ホーエイ）四年、富士山ノ破裂セシ時ニ起リタルモノ、明治二十一年、磐梯（バンダイ）山ノ破裂セシ時ニ起リタルモノヽゴトキ、コレナリ。火山地震ハ、地盤震動ノ區域、オホムネ狹少ナルヲツネトス。

ジスベリ地震ハ、地殼ノ一部ノ、急ニ移動スルニヨリテ起ル。明治二十四年、濃尾（ノービ）地方ニ起リタルモノ、明治二十

九年、奥羽地方ニ起リタルモノヽゴトキ、コレナリ。ジスベリ地震ハ、火山地震ニ比スレバ、震動ノ區域モ廣大ニ、强サモ激烈ナルヲツネトス。

陷落地震ハ、地下水ノ、物質ヲ溶解シ去リテ、ソノ所ニ、空所ヲ生ジタル時、ソノ上部ノ地盤ノ陷落スルニヨリテ起ル。ワガ國ニハ、陷落地震ノ起リシコト、ハナハダ少シ。」

地震ノ原因ヲナセル地ヲ震源トイフ。火山地震、陷落地震ノ震源ハ、オホムネ、小區域ニ止マレドモ、ジスベリ地震ノ震源ハ、多クハ、長キ線ヲナス。

地震ノ强弱ハ、震源トノ遠近ニ關スルコトモチロンナレドモ、マタ、ソノ地ノ地形、地質ニモヨルモノナリ。スナハチ、地盤ノ强固ナル土地、谷、マタハ、堀割ヲモッテ隔テラレタル土地ナドハ、震動、イッパンニ弱ク、地盤ノ軟弱ナル土地、高臺ニ接セル低地ナドハ、震動、モットモ强シ。

地震ノ搖リ方ハ、キハメテ複雜ナルモノナレドモ、コレヲ、上下ノ運動、スナハチ上下動ト、横ノ運動、スナハチ水平動トニ分ツコトヲ得ベシ。震源ニ近キ地ニアリテハ、上下動烈シク、コレヲ遠ザカルニシタガヒテ、ヤウヤク、水平動多シ。上下動ハ、コトニ恐ロシキモノニシテ、今ヨリ、オヨソ百二十年前、イタリヤノ、カラブリヤトイフトコロニ起リシ大地震ニハ、山岳、上下ニ動搖シ、アマタノ人家、飛ンデ、高所ニ移リシコトアリ、マタ、ワガ安政ノ大

地震ニハ、物干臺(モノホシダイ)ニ居タル人、トツゼン、高ク、空中ニハネトバサレタリトイフ。

地球上、地震ノ多キ所ハ、太平洋沿海ノ地方ト、地中海沿海ノ地方トナリ。コトニ、ワガ國ハ、モットモイチジルシクシテ、古來、大地震ト稱セラルヽモノ三百八十餘回アリ。ソノウチ、安政二年ノ江戸大地震ニハ、死者十萬餘人ニオヨビ、明治二十四年ノ濃尾(ノービ)大地震ニハ、死傷者二萬餘人、家屋ノ破損二十萬戸ニオヨビタリ。

第十七課　忘れがたみ。(一)

安政二年十月二日、時刻は夜の亥(ゐ)の刻かとよ。

「地裂け、天落つるか。」とおどろかれたり。

みる〱、百萬の人家、倉庫、神社、佛閣、倒るゝあり、崩るゝあり。家にしかれ、瓦に打たれて、死せるはいくばくなるやを知らず。

一時に落ち來る千萬の瓦、一時に崩るゝ百萬の家の響は、泣き叫ぶ老若男女の聲に和して、たとふるに、ものあらざりけり。

しばらくして、地の震、やゝをさまり、崩るゝ家の響薄らぐに隨ひ、あとに殘りて聞えしは、親を呼ぶ子の聲なり、子を尋ぬる親の聲なりけり。」

近くにも、遠くにも、ことにあはれに聞えしは、しだい〱に細くなる、「助けてくれ。〱。」の聲な

りけり。

ことわりなるかな。　梁に壓さるゝものあり、柱にはさまるゝものあり、土に埋めらるゝものあり、壁にしかるゝものありて、さなきだに、苦むものは多かりしに、地の震ひ動くこと、まだ、やむか、やまざるに、四方の天は、一面に、しだいしだいに、あかるくなりて、さながら、晝のごとくになれるは、所々、方々のつぶれ家より、火の炎々と燃え出でて、焰が天を焦せるなり。

家につぶされて、身は動かず、もだえ苦む、そのところに、燃え來る火のために、煙にむせび、熱さにたへかね、のがれんとしてあせれども、のがるゝことは叶はねば、聲を限りに叫べども、助けに來る人はなし。無慚といふも餘ありけり。」

その夜、わづかの時の間に、死したる人の、その數は、幾萬なるかを知らざるが、中には、いともあはれなる死にざまのものも多かりけり。

運强くして、不思議にも、その身は萬死をのがれしも、親兄弟の無慚の死を、そぞろに悲むものもありけり。

夫婦にてありながら、夫は梁に壓しつぶされしも、妻は、ねだのぬけたるために、下に陥り、不思

議にも、命を助かりたるもあり。梁にしかれたる、わが妻を　助け出さんとあせれども、力及ばざる、そのうちに、あたりは、一面火になりて、みす〱、妻のやけ死ぬのを、殘して去れる夫もあり。

「妻子はいかがなしつる。」と、崩れ家を取除け見れば、こはいかに。妻は、穴藏に、なかば埋まり、片手には、をさなごの足をつかみ、恨めしげなる顏つきにて、色青ざめて死せるもありたり。

されば、この夜の不運のものには、あるひは、祝の席において、あるひは悲の最中に、寐耳に水に

死せるなど、語るもあはれなるものもありけり。

第十八課　忘れがたみ。(二)

これらは人の身の上なり。われにも、この夜の話あり。父は、その夜は、とまりの番にて、家を守り、三人の　子を護りしは母なりけるが、上なる子二人は、母の左右に寐ね、末なるは乳母に抱かれて、枕邊に臥し居たりき。

有るまじきことなれども、「すは。地震よ。」といふとひとしく、乳母は抱きし子を捨てゝ、われのみ、外へと逃げ出でたり。母は泣く子を抱きあげ、右と左に寐たる子を　ゆり起さんとあせりしか

ども、をきなごをかゝへし身にて、大浪にゆらるゝごとく動きつゝ、片手で起す左右の子は、冬の夜の寐入ばなにて、起せども〳〵、いっかな、いっかな起くればこそ。

うつゝにて母に連れられ、外へ出でたる、その時は、地のゆるゝのもやみしあとにて、四方の天は、火事のために、すでに、まっかになりゐたり。じつに危かりしは、われ〳〵親子の命なりけり。そも、安政の地震には、水地なる舊家のつぶれぬものはまれなりしが、われらが住ひしふる家も、潰れぬばかりに傾きたりけり。

今においておもひ起すも、身の毛のよだつはこの夜のことなり。この地震にて、われらが家の、もしや、潰れもしたらんには、わが兄弟は死したりとも、誰をも恨むべきならねど、もし、母が死したらんには、われらが罪にてありしならん。」きりながら、この夜、もし、われら、親子が死したるならば、何ゆゑ、母が死せしかは、世に知る人はなかりしならん。生くべかりしを、子のために、死せしなりとは、誰か知るべき。

今も、なほ忘れぎるは、久しき昔の、この夜のことなり。じつに、ありがたきものは母の愛なり。　母

は、その身の危きをも　顧みずして、一心に、　子を助けんとなしゝものなり。じつに、深きは親の恩なり。　われに、今日あるは、かゝる愛をもって育てくれたる　母ありたるがためなり。　われは、みづから知らざれども、　わが母は、この夜のごとくに、　その身の命の危きをも顧みずして、われ〳〵の　身をば護りてくれたるは、　幾度なりしか知れざるならん。

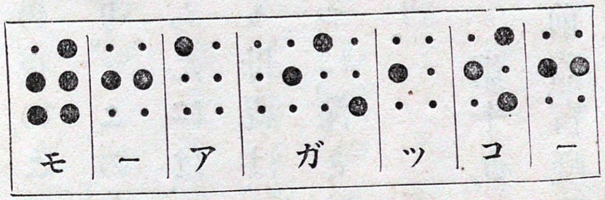
この夜のことは、なき母の、　われには忘れがたみなり。　この夜、われ〳〵、親子より、　運つたなくして死せるものには、　助かるべきを、子のゆゑに、死したる母はいくばくなるらん。

この夜のことは、なき母の、　われには忘れがたみなり。　この夜のごとき天災の、　もし、けふの夜に起らんには、　助かる命を、子のために　捨てんとする母親は、　いくばくなるか知れざるならん。じつに、深きは親の恩なり。　忘れがたきは母の愛なり。

（文學博士外山正一原作節錄）

第十九課　手紙。

前略。盲啞學校にては、いかにして、盲生に讀、書を敎へ、また、啞生に發音を敎ふるかとの御尋に對して、左に、その概略を申し上げ候。



まづ、盲生に讀書を教ふるには、訓盲字といふものを用ひ候。訓盲字は一箇より六箇までの凸點より成り立ち、その點の數と位置とによりて、假名、または、數字の符牒となりをるものに御座候。上圖にて、その大體を御承知下され度候。盲生にこの訓盲字を讀ましむるには、厚き洋紙の面につき出したる訓盲字を、指頭にてさぐらしめ、また、書かしむるには、點字盤とて、金屬製の板の面に、多くの凹點あるも

の、上に厚き洋紙をのせ、金屬製の筆にて、紙上より、點字盤の凹點をつき出さしめ候。

次に、啞生に發音を教ふるには、教師、啞生とともに、大なる鏡の前に立ちて發音し、口の開閉、脣、舌などの動き工合を鏡に寫して、これにまねしめ候。大なる鏡なき場合には、各啞生に、一の小さき鏡を持たしめ候。

さて、盲生、啞生の教育は、常人のとくらべて、低き程度にあることもちろんに候へども、とにかく、かゝる不幸のものまで、普通教育を受くることを得候は、明治聖代の恩澤と存ぜられ

候。まづは、御返事まで、かくのごとくに御座候。

敬具。

三月十日　服部文雄

長谷川　誠殿

第二十課　外交。

ワガ國ハ、古代、盛ニ、支那、朝鮮ト交通シ、室町幕府ノ末カラハ、ポルトガル、イスパニヤ、オランダ、イギリスナドノ西洋諸國トモ交通シテヰタガ、徳川家光ノ時、西洋人ガキリシタン宗ヲヒロメテ、國ヲ危ウスルトイフノデ、支那、朝鮮ノホカニハ、タダ、オランダバカリニ、貿易ヲ許スコトニシタカラ、外交ハ、ニハカニ振ハナイヨーニナッタ。

シカルニ、今カラ、オヨソ五十年前、江戸幕府ガ、諸外國ト、假條約ヲ結ビ、港ヲ限ッテ、貿易ヲ許シテカラ、外交ハ、マタ、ダン〳〵ト興リ、明治維新後、廣ク、知識ヲ世界ニ求メルコトニナッテカラ、ツヒニ、現今ノヨーニ、盛大ヲ極メルコトニナッタ。現今、我國ト交際シテヰル國ハ、アジヤデハ、清、韓、シャムノ三箇國、ヨーロッパデハ、イギリス、フランス、ドイツ、イスパニヤ、ポルトガル、スエーデン、ノルエー、スイス、ベルギー、オランダ、デンマルク、イタリヤ、オーストリヤ＝ハンガリー、ギリシヤノ十四箇國、北アメリカデハ、アメリカ合衆國、メキシコノ二箇國、南アメリカデハ、ペルー、ブラジル、アルゼンチンノ三箇國、アフリカデハ、コンゴ

トノ一箇國デアル。

サテ、國ト國トガ交際スルトキニハ、通商、航海ニ關スルコト、海關税ニ關スルコト、居留民ニ對スル法律ノ適用ナドニツイテ、タガヒニ、條約ヲ結ブノガツネデアル。ワガ國モ、コレラニツイテ、諸國ト、條約ヲ結ンデヰル。ソノ條約ハ、多クハ對等デアルガ、清、韓、シャムトバカリハ不對等デアル。ワガ國ニ居留シテヰル、不對等國ノ國民ガ訴ヘラレタトキニハ、ワガ政府ノ官吏ガ、タダチニ、コレヲ處分スルケレドモ、カノ國ニ居留シテヰル、ワガ國民ガ訴ヘラレタトキニハ、カノ國ノ政府ノ官吏ハ處分スルコトガデキナイデ、ワガ政府ノ官吏ガ、ジブンデ、コレヲ

處分スル。コレハ、カノ國ノ法律ガ不完全デアッテ、ワガ國人ニソノ裁判ヲ受ケシメルノガ、ハナハダ不安心デアルカラデアル。

條約ヲ結ンダ國ヲ條約國トイフ。條約國ニハ、タガヒニ、外交官ヲ駐劄サセテ、外交ノコトヲ掌ラセル。外交官ノウチデ、ソノ駐劄スル國ノ主權者ニ對シ、自國ノ主權者ヲ代表スルモノハ、特命全權大使、特命全權公使、辨理公使ナドデアル。大使、公使ノホカニ、條約國ノ、主要ナ土地ニ居テ、本國人ノ商業ヲ保護シ、カツ、ソノ危難ヲ救フコトナドヲ掌ルモノガアル。コレハ領事デアル。ワガ國ト各條約國トノ間ニハ、マダ、特命全權大使ヲ駐劄サセタ

コトハナイ。

條約國ニハ、ワガ國民ノ居留シテヰルモノガ少クナイ。ワガ國ニモ、カノ國民ノ居留シテヰルモノガ多イ。ワガ國民ノ、條約國ニ居留シテヰルモノハ、ミナ、丁寧、親切ニ待遇サレテヰル。ワレラモ、ワガ權利ヲマゲナイカギリハ、丁寧、親切ニ、カノ國民ヲ待遇シ、大國民ノ寛大ナ心ヲ示サナケレバナラナイ。コトニ、公使ナドハ、前ニ述ベタヨーナ資格ノアルモノデアルカラ、深ク、コレニ對スル擧動ヲツヽシミ、ケッシテ、無禮ヲ加ヘルヨーナコトガアッテハ、ナラナイ。

をはり。

明治三十七年五月七日
文部省檢査濟

明治三十七年三月二十八日印刷
明治三十七年三月二十九日發行
明治三十七年五月十一日翻刻印刷
明治三十七年五月十四日翻刻發行

高等小學讀本六
定價金八錢

著作兼發行者　文部省

翻刻發行者　大阪市東區北久寶寺町四丁目百六番屋敷　三木佐助

印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市日本橋區新右衛門町拾六番地　日本書籍株式會社